



～お葬儀屋さんのひとりごと～

葬にまつわる体験談集

■ お葬式シミュレーション [兵庫県 男性 20歳]

私は現在大学生なので、「葬式」について特に深く考えたことはありませんが、「良き終わりを迎えるため」に、こんなサービスがあったらいいなあ。ということについて提案させて頂きたいと思います。お葬式は、一生に一度のもの。多くの人々にとって、余り縁のないものだといえます。それゆえ、いざ自分のお葬式を考えなければならない時になっても、具体的にどんなことを考え、どんなことを準備し、どんなことについて注意すべきか分からず、結局自分の思いどおりのお葬式を実現できないことが、ままあります。

それで、自分の葬式を疑似体験できるシミュレーションソフトを制作し、体験してもらうサービスを提案したいと思います。このソフトに、お客様の家族構成・予算・親戚や知人など、お葬式に関係のある要素を入力します。そして、すべてのパラメータを入力し終えてから、お客様にシミュレーションゲームを進行してもらいます。そのゲームを進行していく過程で、「あっ、予算が足りない」とか、「遺言をしっかりとっておかなかったため、相続税や相続争いが起こってしまった」というように、今のままでは自分の葬式に問題が起きそうなところや、細部の詰めが甘いところなどを発見できます。また自分の葬式を確実に「自分のもの」とするための手助けになります。このソフトによって、お客様が、自分の「葬式」を、自分の望むような形で実現するのを協力にバックアップすることが出来ます。この「葬式プラン」が煮詰まったところで、そのプランを確実に、第三者が介入することなく遂行するためのサービスです。お客様の「プラン」を文書で、あるいはフロッピーデスク等に入力して、お客様の葬式についての「遺言」として保存してもらうことができれば、なお良いと思います。

■ 大人の心を見たとき [栃木県 主婦 28歳]

何があったのか、中一だった私には知らされなかった。でも子供なりに察していた。母の兄弟達が遺産分けでケンカになったのだ。ある日曜日の朝、電話が鳴った。私はまだ寝ていたが、誰も出ないので受話器を取った。眠くて声がガラガラだった。

「はい、小林です」

「もしもし、春子じゃないな」

母方の伯父からだった。

「うん、違うよ。今出かけてるみたい」

「声色出したってだめだぞ」

「え？」

「声色出したってだめだって言ってるんだ。今から行くからな」

そう言って電話は切れた。何故来るかは想像がついたが、伯父の口のきき方に私はしばらく茫然としてしまった。まるで私を憎んでいるみたいだ。母と声が似ているのは仕方ないのに、何が気に障ったのだろう。つい何年か前まで、ひざにだっこしてくれ、にっこり笑っていた伯父なのに。

小一時間もして伯父と、その長男がやって来た。両親はまだ帰っていなかったもので、応接間に通してお茶を出した。中学生なのだからこのくらいのことをしなければと思ったのだ。

「お茶を出してくれるのか。へえ、ごきげんとりか。春子に言われたのか」。にこりともしないで伯父が言った。私はそんなつもりじゃないと言おうとしたが、悲しくて言葉にならなかった。大人の話の内容はわからないが、もう楽しい日々はやってこないと確信した。大人のきたない面を初めて見た。その伯父も3年前死んだが、お葬式には母も行かなかった。私も、お金のために人間が変わることがあるのだろうか。

(以上仮名)

初盆のご準備は万全ですか！

只今、お盆前のご準備相談を承っております。何をどうすれば良いのか、飾りはどのようにすれば良いのかなど、特に初盆をお迎えになります方はご相談ください。また、初盆祭壇・家紋入提灯・うちわ・缶詰籠やお盆参りをされた方への「返礼品」など、様々なお盆に必要な商品を取り揃えております。お気軽に、ふくし葬祭・光琳会館までご用命ください。